

管理者 古村久美子

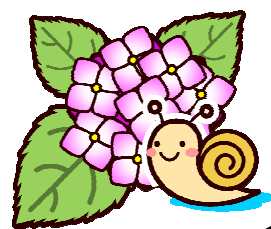
## 暑中お見舞い申し上げます

梅雨が明けたようです。いよいよ本格的な夏の暑さの始まりですね。お子さんが夏休みに入られて、益々、暑苦しい思いをされるお母さんも多いことでしょう。スマイルゆいのスタッフは健康志向の食事、運動(ウォーキングに取り組む者も)を意識して、元気に業務に励んでいます。皆さまはいかがお過ごしでしょう。

さて、来年度の改正に向けて、地域包括ケアが取り沙汰されています。これは、介護保険のサービス以外にも地域の資源を開拓し、高齢者の生活を支えようということも盛り込まれています。元気な高齢者は自身も支える側に回りましょうと、ボランティア活動も推奨されるようです。高齢者自身が自分の役割を持ち、一人ひとりが自立した生活をする意識をしなければ、このシステムは思うように機能しないと思います。この意識の醸成をどう育てるのでしょうか。

話は変わります。90代でもお元気で自立して暮らされている方は、仲間と役割をお持ちです。(何度も同じ話で恐縮ですが)ところが、そんな希望の星だった私の知っている2, 3の方が少し気弱になっていることが気がかりなのです。痛みは身体的な負担以上に、精神的に大きな不安をもたらします。不安がいっぱいに膨らんで、心が滞っているのでしょうか。今まで元気だっただけに面喰っているのでしょうか。「流水不濁」。早く、いい流れをつくるお手伝いをしたいと思います。

暑い中の業務です。事故などにお気をつけて、お元気で過ごし下さい。

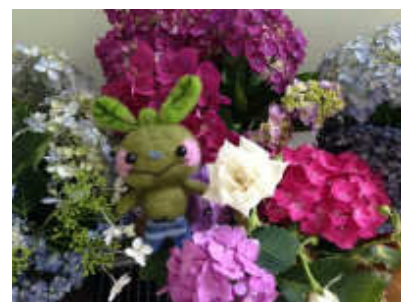


## 地域医療・介護総合確保推進法案 が参議院で可決 !!

平成 26 年 6 月、平成 27 年度の介護保険法改正分を含む法律が成立しました。多くの問題をひとくくりにした大枠の法律ですが、平成 26 年診療報酬改定からも読み取れる「**地域包括ケア**」というキーワードが益々重要になってくるようです。注目ポイントは以下の 3 点です。

- \* 高齢者の自己負担割合の引き上げ(年収 280 万円以上は 1 割→2 割)
- \* 特別養護老人ホームの入所申し込みは原則要介護 3 以上と厳格化
- \* 要支援 1. 2 の方のサービスは段階的に市町村事業へと移行

となっています。ボランティアなどを家事支援に活用するなどの文言も見られ、詳細は今後、という部分もありますが、平成 27 年 4 月 1 日施行は新制度に移行します。ケアマネージャーも頭を切り替えていかなければなりません。



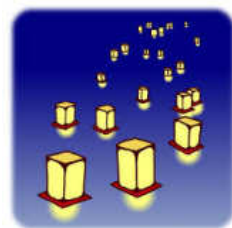
## 「ART STORAGE」 アートストレージ

「ART STORAGE」は、いわゆる知的障がいのある人々が自由に創作している作品を商業利用含め世に出していくプロジェクトです。

ブログでもご紹介させていただきましたが、成年後見で関わらせていただいている方々の取り組みがテレビでも紹介されました。福祉の関係者だけでなく、「アート」として活躍の場がもっと広がることを祈念いたします。



スマイルゆい便り～No.17～でご両親とも自宅で看取られた体験を語ってくださったご家族の方に、その後を経験された身近な人の看取りについて、再び貴重なお話をうかがうことができました。



私は、この四年間に90歳代の両親を自宅で看取ったことを、既に報告しました。その後、悲しいことに、身近な二人の女性を送ることになりました。二人とも私と同年配でした。忙しい現役生活から退き、これから老後を迎える時なのに、自分の命が亡くなることに向かい合わなければならないことは、本当に無念であっただろうと思います。しかし、二人とも自宅で最期を迎えることを、自然に自分で選択したと思います。そして、最期まで立派に生き抜き、家族や親せき・友人に囲まれて生きてくれましたので、ここに報告させていただきます。



一人は、私の近い親戚でしたので、父が自宅で療養しているときにお見舞いに来てくれたり、ちょっとした用事で立ち寄ってくれたりして、父が亡くなる数か月前に、訪問医療や訪問介護を受けながら自宅でゆったりと過ごしているのを見ていました。その際、私は、自宅での医療のシステムについて説明したと記憶しています。まさか、その2年後に彼女本人が同じような状況になるとは思いもしないことでしたが、彼女は、自宅で療養することを決断した時に、「伯父さんと同じようにするわ。同じ先生に頼めそうなので」ときっぱりと電話口で伝えてくれました。静かな口調ですが、とても、強い意思を感じ取れるものだったのを今でも覚えています。

もう一人は、近くに住む友人です。私と同じ時期に仕事を退き、退職後のゆっくりとした時間をともに過ごし、姉妹のような関係で助け合う日々をすごしていました。彼女は、私の父が自宅で療養している姿に、自然に接してしまいました。自宅療養について、彼女には何も説明する必要もなく、日常の姿として受け止めてくれていたと思います。彼女は退職後、非常に活動的に生き生きと過ごしていましたが、急に体調が悪化して帰らぬ人となりました。亡くなる3月ほど前に、もう一人の親しい友人と私に、「貴女の両親を担当したケアマネージャーに相談するわ」と、はっきりと言って、自分の最期を自分で描いてみせてくれました。

このように、二人とも自分で決意し、立派に生き抜く姿を私たちの記憶にとどめてくれましたが、私の両親の最期と接していたことと無縁ではないような感じがします。ゆったりとした空気につつまれて自宅ですごす姿が心の片隅に残っていたので、自宅で最期を迎える決意を後押ししたのではないかとひそかに思っています。



命と向き合った貴重な体験、スマイルゆいのケアマネージャーも関わらせていただき、私たちにとても重みのある言葉でした。本当に貴重なお話をありがとうございます。

